

如是我聞

坤

特別
44
1919
211



○少頃を過ぎて都に歸りてふと云ふ地震の餘人より狼狽
 して危ぬと出ると云ふも不慮と母又向て笑ひて
 を記しに、十世家の外へ飛び出すの心せし、母を
 外へ去るの心せしと云ふも、やんて逃さばと云ふ
 おつゝ、せんをばと云ふ外へ去る心せしと云ふ、
 ナント云々といふも、

○あせ給ふと云ふ、いふに、おつゝ、おつゝ、おつゝ、
 と平書通すも、人を怒らす、いふも、いふも、
 よい、いふも、いふも、いふも、いふも、いふも、

京都府立総合資料館蔵

ちとち物も珠をさし、こんとうろこころと念と兼
書體も出版しとらぬあつて三體ハ即ち其書體
の高標であるの也

○昔一と論説を因珠託とすべし、
論説の表しおる様々因珠託と書えもある

○古天掬飲^て飲し敵を廢せしつゝあるの二株
式のお物も印を下しとすべし何れもその
戦うつハ古びくにあつては其の物も採りてさうと
す

○支那人の心を知ると其の觀念を總て

五戒のゆゑなる鏡のさしとすべし、支那書
をよきとすべしと其の觀念の事とす
こん其のゆるみと及六名の存す

○支那人の漢文と羅馬人の漢文と較べると羅馬人の
のうらまは格も和まらぬとす
支那でも科をのめを昔とす、
づかそそのとめ何とす、
うらまは格も和まらぬ、
とす、
とす、
とす、
とす、

府の力木版彫刻も保蔵するしとまふ論を唱へて
つゝんを余もまゝに日成ひある佛國を以て鋼
版の彫刻と印刷とを以て保蔵せんを、鋼版と
するを一り一する用位をエンヤラヤワト彫る行く
のしあはれ、これを保蔵しなげん佛化の粗悪を
しつゝ磨きをせしむるまじき、まの目みひまの、年之
をまゝく異趣し行くのま、年をこん丈出来
とまふことを示して模範の方を刺激するのまある
つゝ模範を奨励するのまある、即ち年五の精微な
る意心を模範の上より大おぼを具くするまははひ

一程の書楷を振ふるをまゝとまふとまゝとまふと
○早稲田大学の出版部よりなるまの行書と唐人
の書文よりなる書法のものあり、天文東の流字
ものよりまの二つをあるとまふとまふと
まゝに出るまゝとまふとまふとまふと
四年一月のつ一人問答をぬく、あめおれ者、仕
ふし、おれ者、の関説を併し、ことまふ
書物に細微の書入る透きからまゝとまふと
奥書きの微するまゝと、と神龍院のまの書
ト新編のまの書、とまふとまふとまふと

古言ありしに 緯表に異同を 校合し傍訓ヲ
コトト云等々を 加えしものありて 亦古言を以て
其本十五年 梵書朱印と あり 梵書のこと
と此の語を以ての上 是より云ふれは 痛く
この元文流あるの 方記を 抄めし 稀なる 逸案
ありしことと 左の ぬたの 記より 伝へたる
ことあり

神代書ニ冊俗傳ニ 勅板と稱し 元龜帝の刻
才也云々と云あるに 正保帝の 下 略略脚書
恩賜の本也此印 下 今 其家ニ 傳ふ 歟

即元龜帝の 宸翰也 此流字を以て 印出す
一 是書ありし 稀なる 歟

○昔一 論評を 因珠と云ふ ことありし
前より 其の 旨 及び 其の 旨 及び 其の 旨
を以て 論評を 因珠と云ふ ことありし 我抄
りて 見入る 博士 家の 詞 ありし ことあり 又 平維
章云々

因珠は 上下 二巻 注を 何晏 集解 として 記す
る 因珠 博士 の 記 ありし ことあり 又 因珠 記 と 書し
て 五十年 以前 の 板 と 見ゆ こと 伝 古 注 も 早く

傳りたるの條せぬことなきし漢出のとき入る
宋に來りてそのまゝ又行きて程子朱子の義
をたしめんといふ一とき北の言を法印といふ一
一條孫道安の公の尺素に來るるをいふ言を
ゆゑ獨傳の傳といふなり程明帝の時
の人よりき南朝以前を行きて悉く古語を用
ひたる

事と論評の注解をを因縁をいふを以て鄭玄の
疏を出つとみるものありといふ仲弓子游等撰之
論ハ論テ此書ヲ以テ世務ヲ行スヘキヲ以テノ故ニ經

ナリト云ヘリ内轉ニテ窮リテ故ニ輪ナリト云フ萬理ヲ
蘊含ス故ニ理ナリト云フ也

○坊間の方世の免ちるると、雲海の照の事を本
●是昔印のあらざる所がえへる、ふみとくうら二
三代前の唐の法兵衛の意をいふあるは唐の
家より當りて其のあらざるは宋の多人にあらざること
伊方よりそのゆゑなりといふことありておのゝことあり
んを改むる本を記すて其しにきくことあり、今
にも且そのあらざるを免しんあるかある、因る者
へてそのことありて唐の法を代へて一の及ん

う許さんにあつたに探子か或は他日であつたか、
 戸中と云ふのあつたに珠子の相見つて直ぐあつた
 女を妻あしに人もあつたにその時、余のあつたに
 信清共衛即ち放逐さん此唐時を言ふが、
 左中あつた、荒し及中、いんの女あつたに
 女あつたに放逐さん、扱るあつたに
 いあつたに、女ぬきと云ふ此の左中を言ふ
 此の家を言ふが、放逐さん此の女あつたに
 中、ぬき

○上野池の端の錦袋園幸輔の日記云うに

資を授けしまゝの古物をあつたに終に勅言院の
 礎をうへにことを傳の形もやの中り此にんを
 此、幸徳(又云)の流るゝと、錦袋園の
 是上野の武人を刻して勅言院の作持あつたに
 年々武治のつこの本を穿ひ堀し、是を行つたに
 此あつたに、即ち是れいゝあつたに、
 此園を保護し、女権を以つて此の業を言ふ
 是り此の、是れいゝあつたに、
 山田を基時代を言ふに、
 此の、是れいゝあつたに、

くそくふ

○朝鮮書籍の用紙は、と往々、別中、く、換ふ次
き合ハ、ル、このう、ある、其の次、目、を、
そ、く、ま、の、む、バ、ウ、く、ま、う、を、そ、の、ま、い、を、
何、れ、あ、ら、う、う、朝鮮、を、あ、い、い、人、こ、ま、え、し、
ひ、あ、る、

○多、朝鮮、む、書、物、を、買、い、う、と、出、し、
例、は、言、書、校、の、もの、外、を、書、物、を、ま、う、
し、こ、ま、の、ま、い、を、買、い、い、と、ま、い、を、書、物、を、
ま、い、

い、ま、ん、ま、う、指、つ、上、げ、ま、い、よ、う、と、ま、い、の、
い、ま、ま、く、出、法、し、も、後、々、と、指、つ、ま、い、

○日、の、古、版、を、の、表、紙、を、打、出、し、
ハ、紙、を、ま、い、ま、い、と、ま、い、の、ま、い、
ま、い、と、朝鮮、く、ま、い、の、ま、い、
ま、い、の、書、物、を、朝鮮、く、ま、い、
あ、ら、う、と、朝鮮、く、ま、い、の、ま、い、
つ、ま、い、の、ま、い、を、ま、い、
ま、い、の、ま、い、を、ま、い、
ま、い、の、ま、い、を、ま、い、

所七版あり此の終るも猶あり近く清人楊守敬編輯古

種を集め刻し漢土の傳へあり不

思儀もや此任を先皇も或る版といと余ハ

納めあり所の塔銘を以る後といと非復三宗玄

版と定む之の次は洛南九條の教王護國寺

の傳へる弘仁版の仁王護國般若波羅密多

經二卷の書体弘法の請来目録と等し、寺傳

の傳へる傳教大師の書のと号く、比叡山延

曆寺の傳来する鄭審則の跋あり傳教の請来目

録も弘法大師の字体と少しも異る一節とあり

也と疑ふ斗りらんは傳教の校下るといふも理る

余も弘法大師の書のと号く、又此の仁王經の理源大師自

筆の序跋をおきかくえしを平京のちの木代の文の

秘藏とす、次は南山城の龍王寺の什物の款あり成唯

識論十卷ハ天安二年十月十八の跋あり是又東京の柏

木椽古本三卷を跋あり西京の雨森盛氏の心の余も又一

卷を所おす、之を康の宣原大中十二年の跋あり此の

經の紙質弘仁版と同紙の書風と少しも異る不

あり但し弘仁の方と上と一筋の金剛あり此等の經

ハ皆秀く一千有餘年以上の古版と我朝既に鑄

版摩寫の法ありし此の次唐の墨印版施行の奉るき
ハいぶうききせきし抑支那國も秦漢以來其の
文字已知刻石何故不知鑄版哉亦摩寫の古記を録するを
索引するは後漢書蔡邕傳曰蔡邕字伯喈陳留圉
人靈帝時召拜郎中校書東觀遷議郎邕以經籍去
聖久遠文字多謬俗儒穿鑿疑誤後子志平四
年乃与上官中郎將棠懿典光祿大夫楊賜諫議大夫
馬日磾郎張馴韓說太史合軍賜等奏求正定六經文字
許之邕乃自書冊於碑使工鐫刻之於大學門外於是後儒晚
咸取焉乃碑始立觀視及摩寫者車乘日千餘兩填塞

東和史地學圖書

街陌是人皇十三代成務天皇治世四十五年、當今り況、此の時
石經摩寫す、す、本文の如く、然る鑄版の事は、
少し、記さず、次に石刻佛經紀、曰、後唐長興中、始更傳
寫、為、雕、印、舍、至、難、而、就、至、易、由、是、書、之、移、日、以、盛、之、後
唐之明宗長興者、我、朝、朱、在、天、皇、承、平、年、方、之、也、
支那、石、經、之、校、刻、の、事、を、記、す、ヨリ、陳、振、孫、書、經、解、
卷、四、九、石、字、林、一、卷、唐、王、友、翰、林、待、制、唐、玄、度、撰、以、
補、張、卷、之、缺、者、余、昔、年、南、越、出、謁、有、指、故、紙、粥、于、道、右、
乃、古、京、本、五、代、開、運、丙、午、所、刻、也、
書、經、之、最、古、者、云、開、運、三、年、同、朱、在、天、皇、天、長、九、
冊、三、年、
冊、三、年、
冊、三、年、

東和史地學圖書

年より神後景書の後より百七十餘年より此の五代の所
刻を最古と記せしを以て我國といはるらんを以て
其の年を十四とす母昭商傳曰母昭商河内龍
門人後主時拜左僕射同中書門下平章事性好書
酷嗜古文精經術嘗按雍都舊本九經命張德昭
等書之刻石於成都宮蜀土自唐末以來子校廢
從昭商出私財營立興黃金且請後主鑄版印九經由
是文學復盛とあり是則偽蜀の廣政十三年辛亥
の事とす唐以と孟昶の私年より後周の太祖廣
順元年我の朝に村上天皇天曆二年に當り又次ハ

早稲田大學圖書館

宋史藝文志曰周顯德中始有經籍刻板之有無業
札之方獲晴古入金古之始也後唐の長興後晋の
開運版の事を録せざるを以て不審とす是れ
北宋太祖の乾徳開寶年間以來刻板の流布する
べり傳へる経籍また不あり也開寶元年
ハ山融天皇の安和元年とあり此の年十月の跋
あり成唯識論十卷の由一巻傳へたるをあるを
其の圖考より左の如く記す

模寫明詮傍都之卷本

安和元年十一月十日跋此卷畢

早稲田大學圖書館

興福寺沙門真興

依舊點斯

自然生善根

為令群岳覺

欲入二空門

此の成唯識論と奥書紀入りし以前の刻さんと其年月のちんとしと遺蔵より書作天安殿と少しく異なりし且つ御宇内殿とあり御と我國の勢の勢ふとあり又走湯山永延二年三月沙門延尋ら記云永觀之年唐四本朝之摺を言し經論人師述作合束八千餘卷納之とあり永觀八回し此末の大平興四八年のあらんば此の唐をとらんと此末とありしと本朝の摺

本朝の以前しし何うなるま此の入りしものありしなり先哲貞原好古所原貞幹を如の嘉祿の選擇集正嘉の性靈集也き逸しま後世の刻本を以て其初めとすと記せしと又以名山古刹の遺蹟を金匱百重の緘卷容易とすし能くを以て人見し觸んすあり此の誤りを傳へたるも中後原貞幹と東寺の子院より留して龍智院のありし金剛藏を考へて一説より及び其院塔頭のごとくも誤しぬたり好古好古寺を始め數部の若古あんと本寺の校倉に於てを長者

の言の所轄をも用おと聴きさすお方の教をうしあふ
多く減しし事あるに由り又此の校舎を新築す
開し古経古文書等傍侍る就説き又此の書庫を
若く多く其方をわたりおとあわしと以来凡る
八十餘年古と校刻の経の傳へるをわしし保元二
年正月の刻する大般若經の十卷十八の面を造り
其後大般若經の華嚴經の左の奥書を刻する事あり

仁安二年四月の

盧山寺 湖波

金剛佛子重盛寺守

按するに地の大般若經を保元二年に始刻し十年の

後、仁安のあり刻せしあるやと竟り又此の寺盛
ハハ村由府よりよく施財開版の事ありしや
此の後三十五年を死し刻ありしに

○穗井由忠文の親古經に校書印行の記本を勅する
西村より久しと合せしるありし

舊上代史後唐長興三年二月中書奏傳依凡經文字刻
經印版従之とあり條の存経を柳玳家訓序中和三年夏
塞輿在蜀余为中舍人旬休澗書于重城之東南其書多陰
陽雜記其書相宅九宮五緯之流平雕版印紙浸染不可盡
曉と見えしを舊書の如くしんるも浸染らるる此時

いずか即法の備れざる非ざるを北陀羅尼ハ云々天平八年の
草創より七唐の僖宗の中和三年より二十年前より代宗の
房俊二年よりなり然則天下古今改本の魁なるも也
西抄云又曰北天平八年の陀羅尼と記しるも則ち東塔
起龍の年より大和國法隆寺に現存する塔の銘文を
そとに新撰景雲の年節ありて舊本の年より
之より古きと云ふし依し今を天下を採るも亦復
景景景改本より天平八年より三十餘年也
雕版の原始ハ前件に注せる如く北百葉塔より古きと云ふし
此の如く胡應麟の經籍古通考四卷の同一世より

少し許の先達より陸深の燕河紀ハ隋文帝崩り
十三年十月八日勅後像造任憲令雕版とありて引く據
斯説則印書實自隋始又在柳玼先第尚有可疑者
隋世既有雕本矣唐文皇胡不據其遺制房刻諸書復
盡焚五岳以上子弟入弘文館鈔書何耶と云ふも報
の妄説と改んてと云ふ又余意隋世所雕特浮屠經
像蓋六朝崇奉釋教致然未及際雕他籍也と云ふも前説
の攻口と云ふ忘れしや北史志の房根と珍るも昔也の
注説より刻書五代の馮道と始ると云ふも宋人葉夢得
石林燕語明人真弱族と云ふ乗るも唐末の蜀本

喜ぶ日つは別しをさすのつらさ
あつて

大湯作をいんをふき終ると
ふまぬかこを女にあらると言ひんた

○やゆま又支那の事のことろき左のことろ終つた

官軍と云ふおれあつたふし
の仕打と言ふおれあつたふし
官軍と云ふおれあつたふし
を山と云ふおれあつたふし

をいふげきをいふし
すいふりうきをいふし

官軍と云ふおれあつたふし

官軍と云ふおれあつたふし

官軍と云ふおれあつたふし

大湯作をいんをふき終ると

を拵てさん内方ふをふす能ふと

○さかの小路の敗戦をいふ

大なるつれ、其の敗因といふくあるむあつらう、戦術
の於ては其のたのむるに比し一途なる者こそなるべし
其の戦術をよむに後れを著す我々の心算
のえんも、うまに思ひ別とする心算の風、偏して
る高きかきくまのときも、換は換我のちる大略
津なき、えん露の我のたつ能く、大原國のちる地
況をよむ、伊勢の戦のゆゑ、比治候も、同く、換は
換を著す、えんを、そのゆゑ、後れの戦術の後れを著
一途候といふ、左のめく、換えんといふ、その心算
大山後司合のちる、相を著す、その心算を、換え、各陣

言へ通する、中一、戦術の官候と、架う、せ、指
押、と、も、その、心算の、あ、その、心算、西正、傍と
し、その、心算、えん、えん、の、換、周の、後、換、の、心算、
ハトキ、ン、と、換、の、心算、を、著、その、心算、の、心算、
換、の、心算、は、ま、か、換、の、心算、は、ま、か、換、の、心算、
是、れ、の、心算、も、換、の、心算、と、換、の、心算、の、心算、
か、換、の、心算、一、と、換、の、心算、と、換、の、心算、
○日本、の、心算、の、心算、の、心算、の、心算、の、心算、
未、換、入、よ、北、の、心算、の、心算、の、心算、の、心算、
ハ、心算、の、心算、の、心算、の、心算、の、心算、

東洋史

くまのとうのこ一葉のちの標本を交けり。保し中々の衰
めたるふもあはれいけり。此の標本とよふ。此のこころは
むを名詞のふはつて其の標本とよふ。此のこころは
り。此のこころも動詞の用ひたる。此のこころは
あはれ。此のこころも動詞の用ひたる。此のこころは
○このこころは動詞の用ひたる。此のこころは
え。此のこころは動詞の用ひたる。此のこころは
このこころは動詞の用ひたる。此のこころは
このこころは動詞の用ひたる。此のこころは
このこころは動詞の用ひたる。此のこころは

早稲田大學

こい五郎のこころは動詞の用ひたる。此のこころは
このこころは動詞の用ひたる。此のこころは
このこころは動詞の用ひたる。此のこころは
このこころは動詞の用ひたる。此のこころは
このこころは動詞の用ひたる。此のこころは

○古柳馬場とて、其のこころは動詞の用ひたる。此のこころは
其のこころは動詞の用ひたる。此のこころは
其のこころは動詞の用ひたる。此のこころは
其のこころは動詞の用ひたる。此のこころは
其のこころは動詞の用ひたる。此のこころは

早稲田大學

かひ最終に宮城の前面をせよるゆゑを未だ厨殿陣
ハ高枝をよむしういしとよの仕末ひあつて五
人進き行列をさうくし先をさうのひあるに
一歩を便しにのむる

○松本破天童宙とて~~て~~とて~~て~~三日月の
途の上つに別入候も~~の~~の言~~の~~一喜の時
を~~し~~始~~ん~~た、後々後々も~~と~~と~~の~~山東の旅中
の作~~心~~作~~う~~多~~い~~い、今~~の~~の心~~の~~の三四を抄出せん

登泰山

乾坤此處有靈鐘、萬古巍々仰岱宗、岳麓莽莽蒼洲

大野、天門跌宕翠中峰、鬼神從漢時柏、風雨難
尋秦代松、波復紛々帶易主、不知常例幾王封

曲阜

神聖降臨地何人不以容孔林長楸、洙水自溶々
禮樂肉遺和山河、魯魯舊社儼如河、廟在蒼古祀儒宗

有武

斯文本土委寒灰、夫子乘標意遠飛、誰識如今洙泗水
却從東海逆流來

濟南得上提報

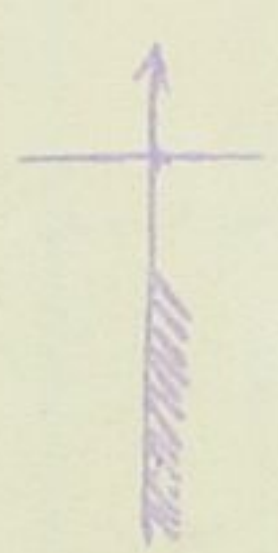
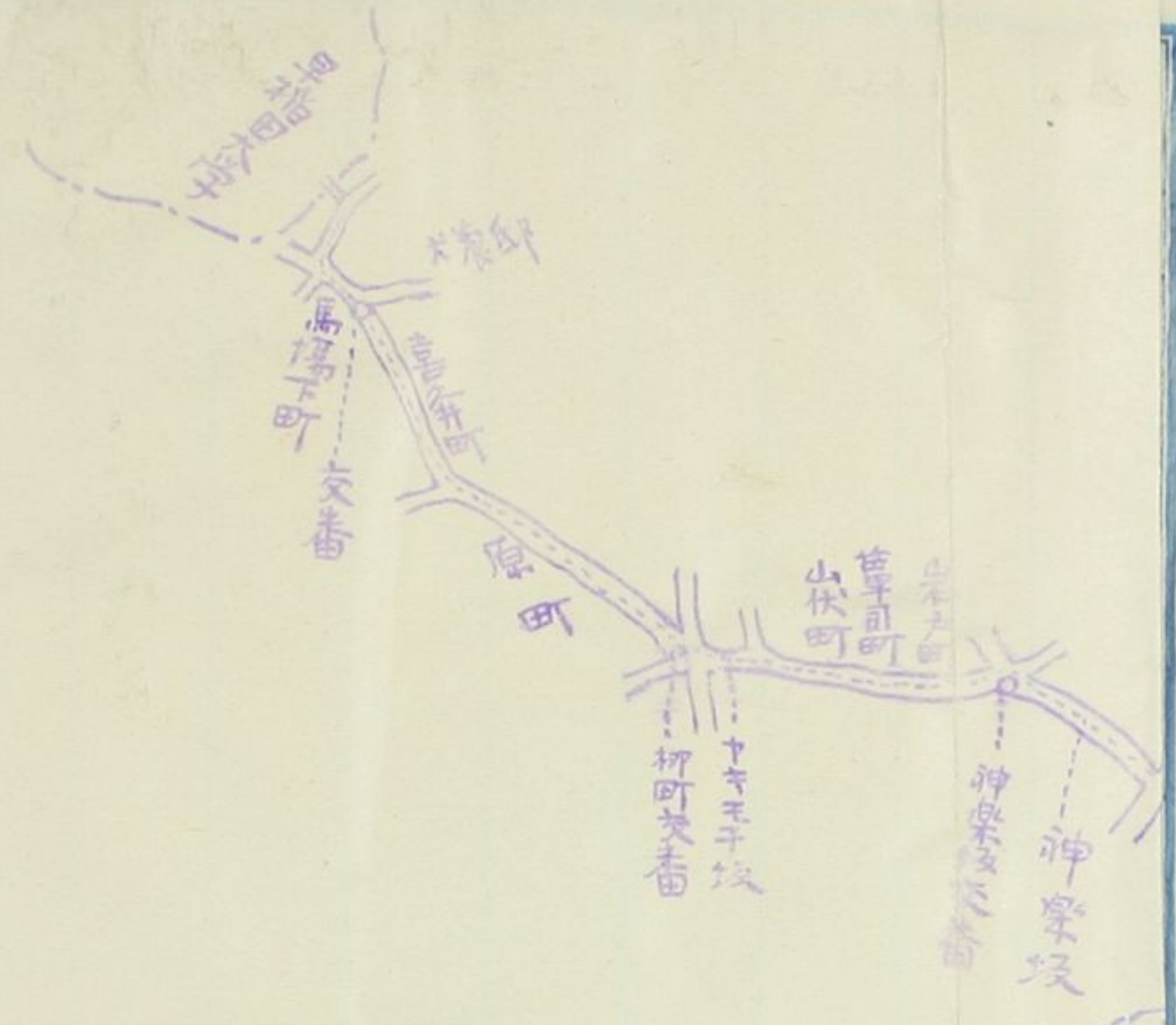
絕海妖氛全掃除、微臣天外喜何如、今宵連飲萬壽

和州府志

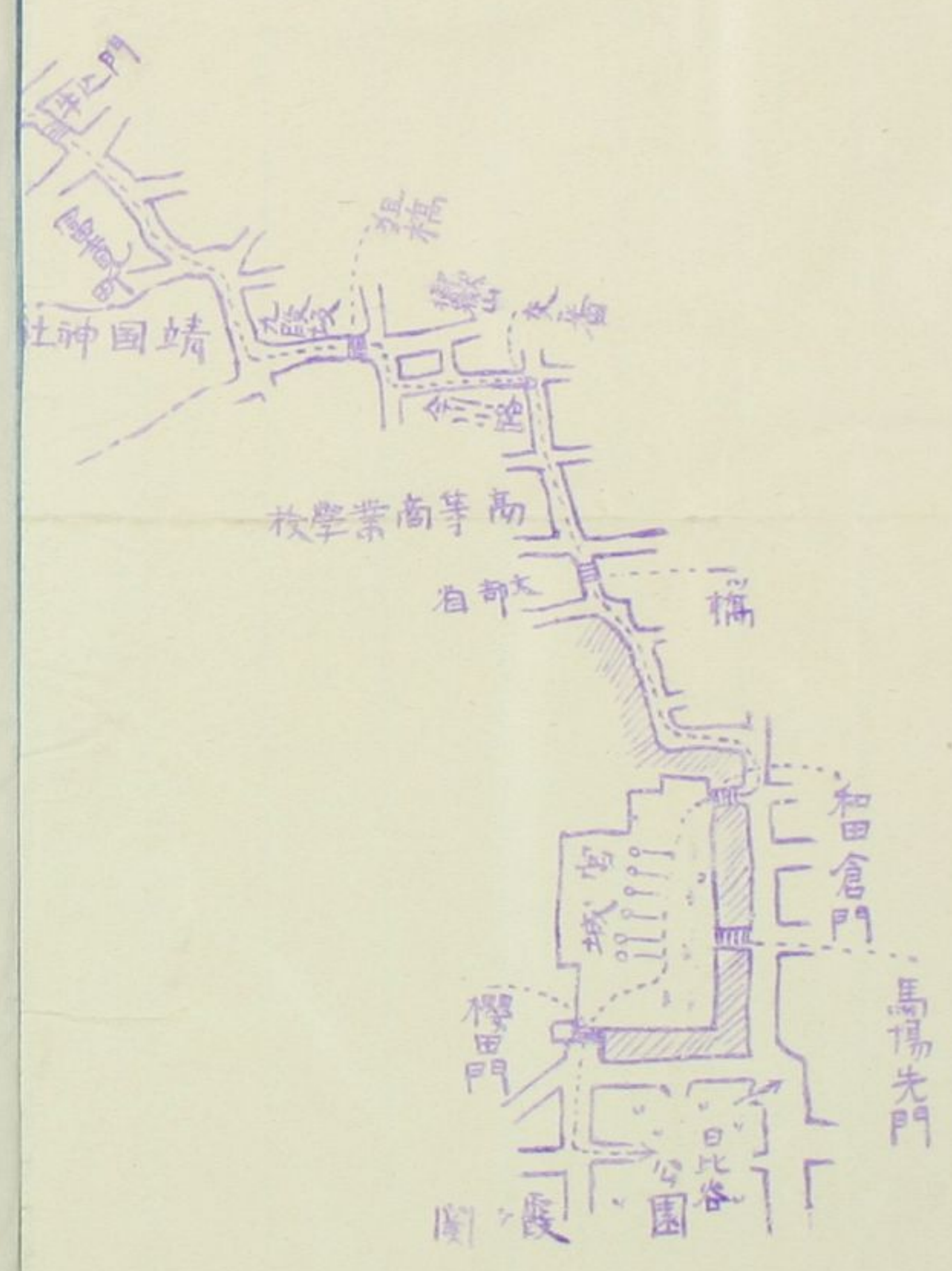
和州府志

皇朝通志卷之四

皇朝通志卷之四



◎ 凡例
 點線、行進
 路ナリ



馬場町
 原町
 山保町
 草子町

馬場先門
 右田倉門
 櫻田門
 園

早稻田大學祝捷行進歌 (明治三十八年三月二十三日) (四百餘州の歌)

大東旭日の國の
祝捷 勝利の軍
光は天に滿つ
前古に例あらず

我れに如かめや
ハルシ+破りしハラス
世界史變へきこと云ふ
前古に例あらず

見よ和平の旦
こゝに渾融し
東西文化の粹
又見お大亞典

正義暴横に勝てり
東天闇晴れて
祝捷 勝利の軍
かゞやく旭日影

Hurrah!
Hurrah!
Hurrah!
Hurrah!!!

祝捷提灯行列

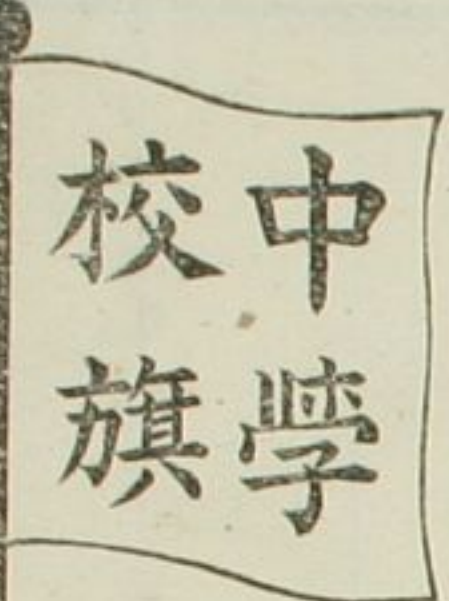
- 一 來廿三日午後五時早稻田大學早稻田中學早稻田實業學校合併舉行ス(雨天順延)
- 一 當日午後三時花火ノ合圖ニテ本校構内廣場ニ參集ノ事
- 一 午後五時左ノ順序ニ依リ發程

行列順序

第一部(中學)



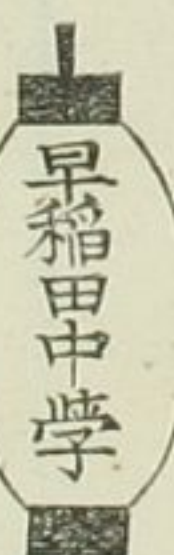
福田 宮川



岡田嘉助 東條



(樂隊)



池田

總長 大隈信常

副總長 增子喜一郎

幹事 北村

主 藤 房 三

第一組 組長 中野禮四郎 (此間十五間)

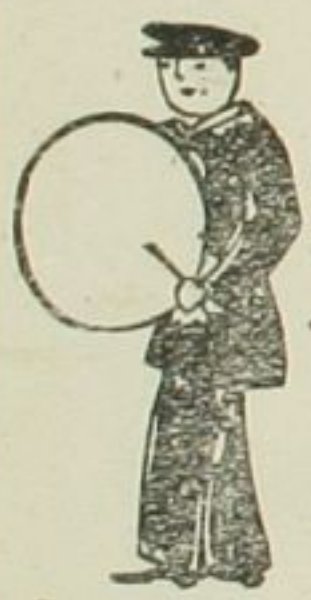
東組長 關澤 房三
西組長 大久保 作
南組長 佐藤 一

第二組 組長 安東伊三次郎 (此間十五間)

東組長 杉山 得雄
西組長 和田 丑
南組長 和智 英

第三組 組長 講師 中桐 確太郎 (此間十五間)

東組長 祝島 達雄
西組長 小田川 正
南組長 增田 雄



(樂隊)

早稻田中學

第四組 組長 講師 松本 洪

(此間十五間)

東組長 宮坂 錦吉
西組長 小田 通
南組長 木村 勇

第五組 組長 講師 山口 大藏

(此間十五間)

東組長 大西 熙
西組長 原 政
南組長 川島 彰
北組長 廣本 巨

第六組 組長 講師 藤野 了祐

組長 講師 服部 春之助

東組長 櫻井 龜之助
西組長 佐藤 五郎
南組長 伊藤 幸夫
北組長 唐澤 多水

早稻田中學

衛生隊 組長 小林 剛 策

(此間十五間)

第二部 (實業學校)

實業學校旗

職員 森山 美夫

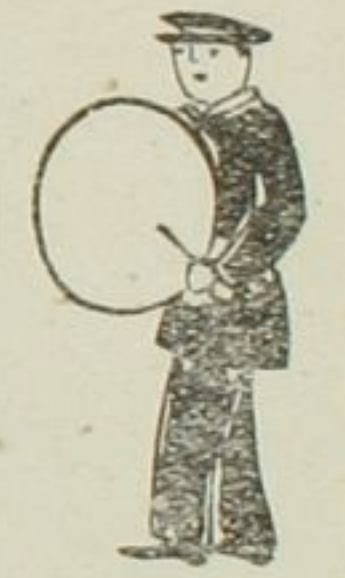
井上

實業學校

總長 校長 天野 爲之

副總長 幹事 山本 尙志

總長附 明石 諤、村松 藤次郎



(樂隊)

組長

學生 國富 恒雄
全 上野 安紹

實業學校

第一組 組長 講師 依田 直伊 渡邊 眞 靖

土屋 長吉 (學生) 長倉 眞 氏

實業學校旗

實業學校

職員 石川 武雄

城島 三治

堀内 庄藏

第二組 組長 講師 二木 千年 (學生) 東 則 吉 正

喜安 磯太郎 (學生) 加藤 照 吉

實業學校旗

職員 中山 忠治

實業學校

高島 鶴一

第三組 組長 講師 小野 寅吉 (學生) 吉 富 豐 助

本多 寅吉 (學生) 早川 直 助

後方組長 松原 操

後方附 大平 正 三 郎

第三部 (高等豫科)

大學

高 井

早稻田大學

正 根 山

總長 校長 鳩山 和夫

副總長 幹事 田中 唯一 郎

總長附 入江 寬六郎、石井 末三郎、池田 七藏



(樂隊)

組長

職員 小柳 善太郎
全 五條 恭藏

部員 職員 坪山 良顯
全 鈴木 喜太郎

高等豫科

星野、會田 (福島、田中)

第一組 組長 講師 平井廣五郎 職員 伊田甚藏 小久江成一	第二組 組長 講師 伊田甚藏 職員 小久江成一	第三組 組長 講師 宮井安吉 職員 永田匡一	第四組 組長 講師 池田純吉 職員 坂本留松	第五組 組長 講師 池本純吉 職員 佐藤靜夫	第六組 組長 講師 渡邊俊治 職員 吉池幸忠	第七組 組長 講師 小林行昌 職員 梅村誠太郎	第八組 組長 講師 吉田己之助 職員 杉山令吉
--	-------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	-------------------------------	-------------------------------

第九組 組長 講師 高杉瀧藏 職員 武村由太郎	第十組 組長 講師 吉田良三 職員 小野谷佐介	第十一組 組長 講師 大坂榮 職員 江口物吉
-------------------------------	-------------------------------	------------------------------

衛生隊

丸山、神山(朝倉、柳原)

第四部 (大政、專政、大法、專法)

政學部

八木澤、中野(清水、關山)

第一組 組長 講師 山澤昌貞 職員 中村進午	第二組 組長 講師 安藤忠義 職員 小池甚一郎	第三組 組長 講師 山田三良 職員 福岡幸太郎	第四組 組長 講師 原口善次郎 職員 高田宗憲	第五組 組長 講師 加藤正治 職員 小田藤三	第六組 組長 講師 美濃部達吉 職員 奧田六郎	第七組 組長 講師 本多淺次郎 職員 昆田重三	第八組 組長 講師 原嘉道 職員 和泉新平
------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-----------------------------

第九組 組長 講師 鈴木喜三郎 職員 野口敬策	第十組 組長 講師 岩島一平 職員 小飯高祖	第十一組 組長 講師 坂本三郎 職員 池田龍二
-------------------------------	------------------------------	-------------------------------

法學部

島野、加藤(清水、四郎)

早稲田大學圖書館

第五部 (大商、大文、高師)

商科

錦木、島崎(前野、酒匂)

第一組 組長 講師 和田 文三 全 今井 友次郎 全 圓城寺 良 職員 全	第二組 組長 講師 平沼 淑郎 全 横井 幸吉 職員 全	第三組 組長 講師 土子 金四郎 全 關 格次 職員 富塚 格次 (此間十五間)	第四組 組長 講師 坪内 雄藏 全 金子 馬治 全 巖谷 季雄 全 坪井 正五郎 職員 服藤 利夫
學生 上遠野 孝 學生 賴 八郎	學生 上村 憲司 學生 上田 晴雄	學生 生方 貞一 學生 伊藤	學生 赤井 慶介 學生 永山 定富

文學部

石田、秋山(赤池、松山)

第五組 組長 講師 藤井 健治郎 全 吉田 賢龍 全 村上 恒精 全 赤堀 又次郎 職員 蔦田 覺次郎 (此間十五間)	第六組 組長 講師 川上 正光 全 增田 藤三郎 全 内崎 作三郎 全 久米 邦武 職員 八木原 季雄 (此間十五間)	第七組 組長 講師 浮田 和民 全 中島 半次郎 全 佐々木 政一 全 岡田 正美 職員 中村 芳雄	第八組 組長 講師 伊藤 潔 全 田中 阿歌 全 尾上 成郎 全 石川 謙次郎 職員 伊藤 潔 (此間十五間)
學生 白松 孝次郎 學生 鈴木 壽	學生 横山 有策 學生 影山 千萬樹	學生 森照 美樹 學生 小野 龜太郎	學生 坂口 鎮雄 學生 宍戸 留兵衛

高等師範部

山口、矢島(瀬戸、宮川)

校友

福田、堀田

第九組 組長 講師 那河 通世 全 中村 久四郎 全 保馬 祐政 全 片山 孝一 職員 宮崎 錠太郎	第十組 組長 職員 山本 利喜雄 全 越智 修吉 全 山田 太一郎 全 栗山 善精 全 佐藤 善一
學生 大石 廉一 學生 長尾 景幾	全列整理員 講師 藤山 治一 職員 吉田 弟彦 職員 佐藤 善長 職員 服藤 利夫 職員 圓城寺 岩根

行列心得

- 一行列ハ一組凡ソ百名トシ三人併行ノ事
- 一凡ソ二組毎ニ二十五間ヲ隔ツル事
- 一學生組長ハ團ノ右側ニ配列スル事
- 一組員ハ組長ノ指揮ニ從フベキ事
- 一進行中ハ姿勢ヲ紊サザル事

- 一組員ハ組長ノ許可ナクシテ列ヲ離レ又ハ他列ニ轉ズベカラズ
- 一提灯ハ高ク捧グル事
- 一午後三時煙火ノ合圖ニヨリ一同所屬集合地點ニ(學科ニヨリ立札アリ)集リ組長ノ指揮ニ從フテ提灯ヲ用意シ併行スル事
- 一行列ニ加ハル者ハ制服制帽若クハ袴着用ノ事
- 一講師ハ「フロックコート」黒帽ノ事
- 一下駄ヲ穿ツ者無提灯ノ者ハ列ニ加ハルヲ得ズ
- 一行列中ハ靜肅ヲ旨トシ唱歌ノ外妄ニ喧騒スベカラズ解散後ト雖モ學生タル體面ヲ瀆スノ行ヒアルベカラズ
- 一酒氣ヲ帶ヒタル者ハ列ニ加ハルヲ得ズ
- 一怪我人又ハ病人ヲ生ジタル時ハ組長ハ校醫ニ報告シ適當ノ處置ヲ爲スコト
- 一宮城前ノ廣場ニ於テハ組長ノ指揮ニ從ヒテ整列シ列外ニ出ツベカラズ
- (陥ル慮アレバ堀ニ近寄ルベカラズ)
- 一併列ノ上ハ一同脱帽直立シ君ガ代ヲ吹奏シ(三回)總長ノ發

早稲田大學圖書部

聲ニ連レテ萬歳ヲ三唱シ他ハ一切喧騒アラザル様特ニ謹肅ノ事

一萬歳ヲ唱和シ終ルモ一切列ヲ紊サズ組長ノ指揮ノ下ニ順次櫻田門ヲ出デ日比谷公園ニ入り散會スル事

一蠟燭ハ一本ヲ使用シ一本ハ携帯スベシ提灯ノ中ニ置クキハ溶解スル憂アリ

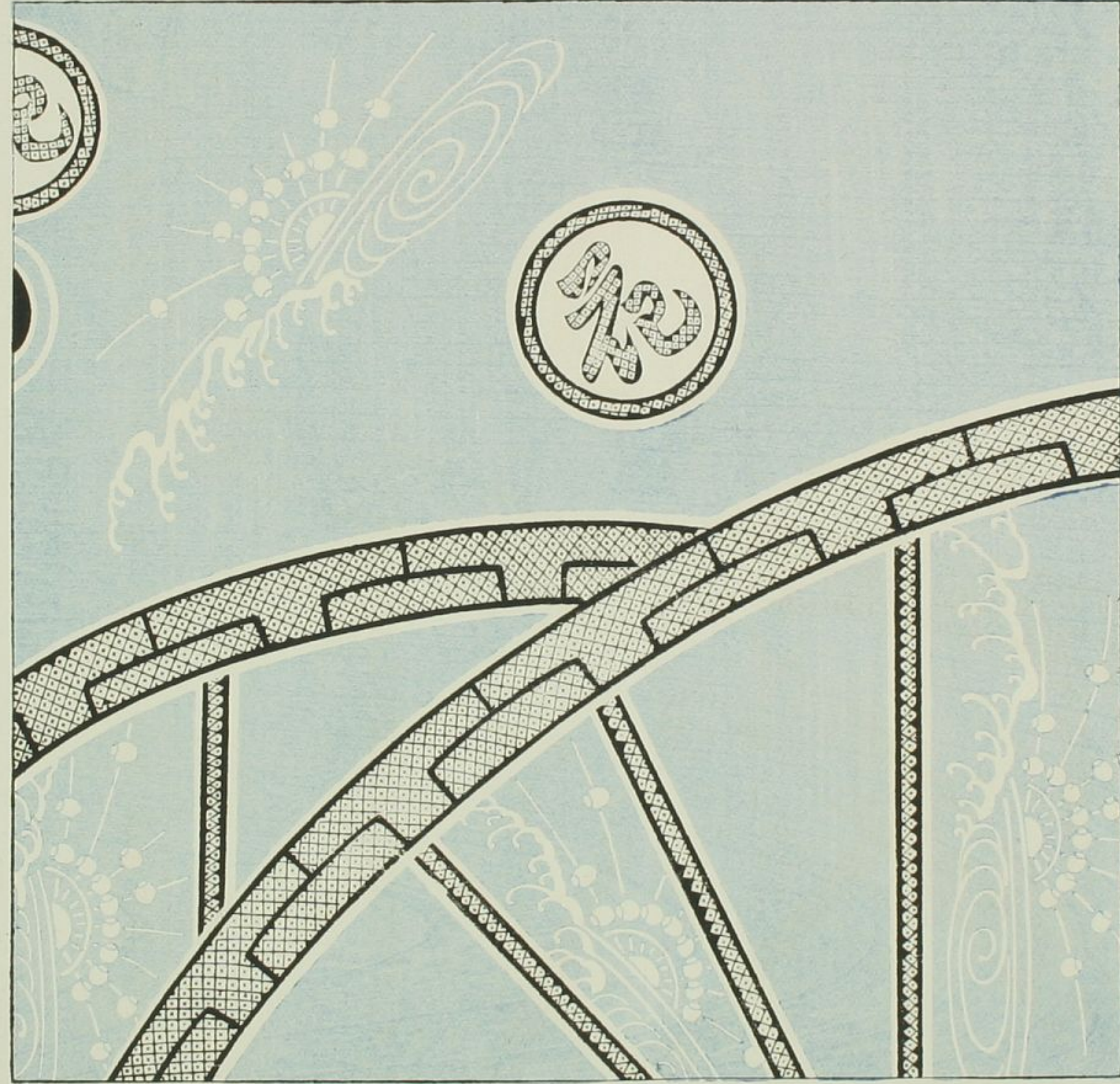
一行列中萬燈其他各自ノ餘興異裝ヲ爲サマル事
一曇天等ニテ煙火ノ合圖ヲナサマルキハ順延ト心得可事
一當日(廿三日、木)翌日(廿四日、金)ハ休校ノ事

皆に元氣よくあつた
後五六番の演劇も一巻も捕獲し其の
その演劇もあつたことであつた
は、後はお打揃え

つらと埋めんとす
の壯観を人をもつて快死を
呼ハし免れ、まればるを曰
ゆる慈き記し、此の心を
うくは、其の心で、この人
の死後にも、こんふ、

つらと埋めんとす
の壯観を人をもつて快死を
呼ハし免れ、まればるを曰
ゆる慈き記し、此の心を
うくは、其の心で、この人
の死後にも、こんふ、

又行し、歌を、何れも、色の、執事、の、係り



古友染紋服紗

子爵榊原政敬君藏

以下全て

白紙

明治三十八年三
月上浣起筆

春城閑人